

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第二十二号（二〇〇八年三月）

風に吹かれて（一） 白井啓治

先日のこと。突然主治医から「肩が凝りますか」と訊かれ、何のことかと一瞬間食らってしまった。一月号に、やり残したものを風呂敷に包んで担いで歩くのはやめた、と書いた雑文を読まれての話であった。

実際に今年に入ってから、この「ふるさと風」の編集と「ことば座」の女優、小林幸枝さんへの朗読舞の戯曲の執筆以外の事は全て風呂敷から出してしまった。これで少しは肩の荷が軽くなり、肩凝りもなくなるかと思ったら、逆に一個の荷の重さが確りと自覚できて、昨年よりも風呂敷の荷が重く感じられるようになった。このふるさと風は、現在、私を含め六名の会員が、毎月ふるさとの「風の言葉」として、「ふるさと」の歴史・文化の再発見と創造を考える」をテーマに、何らかの文章を書いている。今月で第二十二号になるが、これまで「今月はパスします」という人は誰もいなかった。改めて考えると、これは凄いことである。そう自覚したとたん荷の重さが倍になってしまったのである。ことば座、朗読舞女優の小林さんに対する戯曲も同じである。彼女の表現力のアップに伴い、彼女に提供する物語の中に配する恋の詩にもこ

れまで以上の広がりのある感性が求められてきた。これはもう本当に重い荷物である。しかし、これは嬉しい事ではある。

自分の選択した荷が重いと感じられるのは、実は、その荷が自分にとって大切なものと思えるようになってきたことを意味する。まあそれほどに、などと考えている間は風呂敷に包み込んだとしても、それが荷物だと主張してくることはない。自分の暮らしにとって何の意味も持たないもので、風呂敷の結びの隙間から零れ落ちてしまうものである。その意味で、この「ふるさと風」と「ことば座」が自分の担ぐ荷物と思えてきたのは嬉しいことである。

昨年、十一月号から、獣医師の菅原さんが新しい仲間として参加していただいているが、本の幅が一つ広がり、とても愉快な気持ちにいる。動物学を通しての話は、ふるさとのあるべき姿を考える上でとても参考になるものである。EPCの話がふるさとのあるべき姿と何の関係があるのだと言われる方は、過激な言い方であるが、この会報は読んでいただかなくても良いと個人的には思っている。

今月号に書かれている「生き物の本性」も大変面白い。菅原さんの文に触発されてではあるが、私たちは拒否と受容の二つの選択肢の中で

生きている。

拒否するか受容するか根源的な判断基準は、快と不快である。そして、言葉というのはそれを伝える手段として生まれてきたとも言える。

そして、面白いことに快を表現する言葉よりも不快を表現する言葉のほうが圧倒的(?)に多いのである。豊富といったほうが適切かもしれない。特に日本語ではそう思えるのだが、言語学を学んだわけではないので判らない。

しかし、このふるさとで耳にする言葉の拒否が何と多いことかと思う。このことをよくよく考えてみると、快と不快の性格の差によるもののように思われる。つまり、快と不快の心理を能動と受動に置き換えてみると納得がいくように思う。

快と思う心理は、能動的な心理がないと多くを得ることが出来ない。快を受動的に求めていてもなかなか得ることが出来ないものである。何に対してもまずは拒否から出発してしまうのは、受動的な心理が働くのではないだろうか。快の感情は、まず受容して見ないことには分からない事が多いといえる。棚ボタ式の快なんてそんなに多くあるわけではないのだから。

拒否と受容の判定基準は、快と不快なのであるが、快は能動的な中に多く存在するのだから、パラドックスではあるが、まずは受容を考えないと快は得られないといえる。

このふるさとに足りないものは何だろうかとか考えたとき、もつと能動的に快を求めることではないのだろうか、と試してみたのだが果たし

てどうなのだろうか。

小林さんには、常世の国の風景をモチーフに恋の物語を書いているのであるが、恋を考えたとき、恋心は受動的にはなかなか生まれられないものである。

このふるさとに恋をしたいのであれば、もつと能動的に快を求めていかなければいけないのではないだろうか。

生き物の本性

菅原茂美

『生き物の本性とは？ 一言で…』と問われたら、私は『縄張り争いをするもの』と即答する。どの生物を見ても、「我(が)」を突っ張り、己のテリトリーを強く主張して生きている。

さて地球に生命が誕生して三十六億年。以来明確な証拠が挙がっているだけでも、カンブリア紀以降、直近五億年間に、生物が大量絶滅(五〇〜九〇%以上)した事件が、五回も繰り返されている。最後には、六五〇〇万年前、中米ユカタン半島に直径一〇キロの小惑星が衝突し恐竜が絶滅した。ほか殆どの絶滅の原因は、温暖化、海洋酸欠、硫化水素充満などである。にも拘らず、この地球上には、現在約一千万種とも言われる多くの生物がひしめいている。生息の密度が増せば当然の結果として、争いが発生する。それが「縄張り争い」である。

『生きる』と言うことは、生物学的にはまず栄養を充足して成長し、種特有の体躯を維持し、

子孫に己のDNAを託し、老化して寿命を全うする。即ち「栄養争奪戦・繁殖相手争奪戦」こそ縄張り争いの本質であり、そのために全知全能を傾けて闘う。微生物から人間に至るまで、毒素攻撃・共食い・序列闘争・下克上・宗教対立・大量虐殺・世界大戦など数え上げたら切がない。

一九二八年、フレミングがペニシリンを発見したのも、シャーレ上での微生物同士の縄張り争いの結果であった。鮎の友釣り・色々な動物のマーキング行為(臭いづけ等)・戦国時代の国取り合戦・そして今日の経済戦争・色々な権力闘争等、ことごとく血みどろの縄張り争いと言える。人類で見れば進化の過程で、長かった野性時代のDNAに刻まれた飢餓対策・種の保存対策、これが縄張り争いを生む「深層心理」であろう。

さて縄張り争いは植物にも見られる。より多くの太陽エネルギーを確保するために熾烈な闘いを行なっている。ヤブカラシの根性なんて見上げたものだ。絡まった樹木を枯らしてまでも、太陽光を独り占めしようとする。又、根から毒素を出して、回りの植物を枯らし、自分達だけ繁殖しようとする植物もある。

生物には、葉緑体で無機質から光合成で有機物を合成する「独立栄養」の植物と、それを食べる草食動物、更にそれを食べる肉食動物など「従属栄養」の動物がいる。そしてそれらの死体や排泄物を分解・栄養源とするバクテリア。正に生命の輪廻のドラマだ。ゆえに、このバラ

ンスのとれた食物連鎖の流れを、人間のご都合で、勝手に断ち切ってはいけない。環境破壊で他の種を絶滅させるなどは、共倒れ、即ち人類滅亡への前兆といえる。

しかし一方、大方の生物は回りの他の生物との関わり合いの中で生きていることも事実。例えば人間も鼻孔・耳孔・臍・臍などに乳酸菌などを棲まわせ、他の悪性の細菌が繁殖できないように身を守っている。故に抗生物質の乱用は、大事な共生菌をも殺すことになり、更に薬剤耐性菌を生むことにもなるので、厳重な注意が必要。又、腸内細菌の助けがなかったら粗繊維など殆ど消化はできない。これらは縄張り争いをしながらも、共生で生命を維持し、その様なシステムをしっかりと獲得したもののみが、適者生存として現在生き続けているといえよう。

さて、フランスの科学哲学者パスカルは『人間は獣と天使の中間に位置する』と言っている。獣とはどういう意味で言っているのかわからないが、もし残忍非道な者とも言っているとしたら、それは当たらない。なぜなら動物は、所詮、他の生命を奪う従属栄養でなければ生きていけない。生命とはDNAの新陳代謝だ。取り入れた栄養物質で体を構成し、活動のエネルギーを得、老廃物を捨てる。そしてこのDNAが活性酸素等で傷付き、老化すれば生存が危くなるから急いでコピーを造り、次世代に命を委ねる。あらゆる競争相手を蹴飛ばしても、己のDNAを存続させようとする。これをR・ドーキンスは、人間を含めたあらゆる生物を「生存機械」

として、個体ではなく遺伝子そのものが、生存のために利己的に振る舞う結果なのだと言っている。

故に好むと好まざるとを問わず、他の命を奪って栄養にしなれば己の種が亡びる。これを動物の行為として蔑むなら、パスカル先生も見当違いというもの。従って裏を返せば、天使などというものはこの世に有り得べくもない。利他行為で固まった生物など生存できるわけがない。利己的な遺伝子の活動に支配された個体のみが生存を許される現実をしっかりと認識する必要がある。まして現生人類は、野性的に生きる諸機能が極度に低下または退化し、進化論上の失敗作といわれているので、滅亡への坂道を駆け出したら、アツというまに終着駅という可能性も十分有り得る。地球規模で悪性の感染症に襲われたら、大混乱に陥り、収拾付かなくなる恐れも十分にある。ウイルスと人類との戦いは永遠に続く。故に、かつての多くの化石人類や、近くは三万年前に忽然と姿を消したネアンデルタール人のように、現生人類の種としての寿命も、もうすぐ尽きようとしているとの推論も成り立つ。未来学者は良くても百万年、最悪なら、後一万年が、そこそこも言っている。

産業革命以来積み重ねてきた地球の温暖化に歯止めが掛からず、大国のエゴや経済成長至上主義に牛耳られて、今確実に軌道修正できないのなら、人類は知的生物などと奢れる態度は笑止千万。我々の子孫が安全に住める環境を確実に残す事こそ、今、全人類に課せられた最大の

責務である。ヒマラヤの氷河が溶け、低地が水没し、東京やニューヨークに熱帯の毒グモ・毒ヘビがはびこり、マラリヤ・黄熱病等が蔓延。それでは遅すぎる。にも拘らず、内外とも、我が田に水引く事に汲々としている今日の狭視野政治には、ほとほと嫌気がさす。

しかしそうはいっても人類は、普通の獣とは多少は違う。戦争や環境破壊を抑制できない愚か者ではあるが、芸術や文化を生み出す、それなりの知性は持ち合わせている。極楽浄土をこの世に実現しようとした奥州平泉・藤原三代の例もある。夢を持ち、争いのない桃源郷に憧れ

るのは、天使により近づこうとする人間の叡智なのである。だがしかし、その平泉も鎌倉という、より強大な勢力により破壊されたように、これぞ正に、人間の性(さが)。本性はやはり争って己の「場」を強力に主張する。どのように善意に解釈しても、人間は中間よりも天使に近い存在とは言えない。即ち生存競争に明け暮れる獣に、より近い方に位置すると言わざるを得ない。従って孟子のいう「性善説」など、超甘っちょろい。そんな夢追い酒に、私は酔いしれるつもりは、毛頭ない。

ギター文化館発

常世の国の恋物語百

ことば座2008年定期公演日程

第7回公演	4月20日(日曜日)
第8回公演	6月15日(日曜日)
第9回公演	8月17日(日曜日)
第10回公演	10月19日(日曜日)
第11回公演	12月21日(日曜日)

2008年「ことば座夢クラブ」年会員募集中!!

平成20年「ことば座夢クラブ」年会員を募集しております。会員様には、ギター文化館での定期公演の入場のほか、ことば座主催の公演の割引、年四回発行の季刊紙の送付などの特典があります。ふるさとに生まれた全く新しい手話を基軸とした舞台表現、朗読舞と朗読舞女優小林幸枝をぜひ応援下さい。

●個人年会員 10,000円

●法人・団体会員 30,000円 口会員 50,000円 口会員

詳しくは下記ことば座事務局までお問い合わせ下さい。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

0299 24 2063

fax 0299 23 0150

豊かな自然と歴史の里石岡 兼平ちえ

八郷町歌

作詞・作曲 明本京静

一、筑波三山に 抱かれて育つ

八郷よいとこ かき岡 小幡

あし穂 恋瀬や 瓦会 園部

林 小桜 がっちり組んで

築く平和の理想郷

二、いとしいとすと 恋瀬の川に

遠い日本武尊の 苦勞をしのびや

若さあふれて 力は湧いて

握るすき くわ 黄金にひかる

八郷よいとこ のびる町

三、桜ふぶきの 東大 地磁気

かおるつつじは あの殉国碑

あれは板敷 炭焼くけむり

ふくれみかんや かき 栗 たばこ

みたまおどりも なつかしや

四、お願かけましょ 加波山様へ

日照りつづきの 雨ごい詣で

古ふん参りに 松風聞けば

はるかむかしに つながる我等

八郷わがさと わが郷土

やとつ音頭

作詞・石井吉明 作曲・野田ひさ志

一、ハアー

菊の笠間に 紅葉の筑波

なかのやさとの みかんがり

あれはあれは柿岡 紅霞

イカツペ ヨカツペ ソウダツペ

ホンニやさとは

イトコダツペ ソウダツペ

二、ハアー

俺が町には 庭石しゃいらぬ

加波のやまなみ 見て暮らす

あれはあれは 湯袋湯のけむり

(二に同じ繰り返し)

三、ハアー

白いジュータン ありや梨の花

紺のかすりの 可愛い娘が

花を花 摘む手に蝶が舞う

(二に同じ繰り返し)

四、ハアー

想い出したら また来ておくれ

やさとあなたの ふるさとよ

空の空の 青さが目にしみる

(二に同じ繰り返し)

五、ハアー

夏の板敷 親鸞様を

偲ぶ木立の蝉しぐれ

あれはあれは 峯寺鐘の音

(二に同じ繰り返し)

六、ハアー

みたま踊りや ひよつとこばやし

踊るあの娘の しなのよさ

せめてせめて 月見を恋瀬川

(二に同じ繰り返し)

千五百人余りの人口都市に誕生しました。観光PRとしてのうたい文句も「歴史の里いしおか」から「豊かな自然と歴史の里石岡」に変わりました。

旧八郷の豊かな自然と旧石岡の古代を中心とする歴史とが本来の常世の国に還る形となって、全国に自慢のキャッチフレーズと感じました。小紙の先月号に感動の石岡市民歌と音頭をお知らせしましたが、豊かな自然の八郷地区にも、また感動の歌、音頭がありました。全国的に、「ふるさと」の良さが見直されている中、思わず行ってみたい、住んでみたい気持ち湧き上がってきます。

前回の会報を読んで下さった旧石岡の皆さんから早速、小学校の運動会に聞いたことありますよ、踊ったことありますよ、とお話を頂きました。現在も運動会などで続けられているのかは確認できませんでしたが、小、中、高校生にはふるさとの唄を口ずさんでほしいと思いました。

さて、八郷地区で私の感動したことを二つほどお話して見たいと思います。八郷地区に感心することは、皆さんが観光PRに懸命なことです。

その一つは、一昨年からは、新聞やテレビ報道で知られている菖蒲沢薬師古道での中村実様を会長とする地元保存会の皆さんの、薬師堂、薬師如来像の復元への熱意です。全国のみなさんからのご寄付を募ったところ、予想以上の御好意と励ましが寄せられたそうです。

もう一つは、八郷のアルハンブラこと柴間にあるギター文化館です。地主さんの杉山ハツ様は現在もご健在の八十歳半ばと聞きました。今から二十三年前（昭和六十年）に書かれた手記には（原稿が同館に掲載されている）、この地を希望と安らぎの里にしたい、都会の人と八郷の人達が談笑している場所にしたい、との熱い想いが綴られています。

十六年前に創立されたギター文化館は、周囲の景色もスペインに似ているということからも注目され、土曜、日曜には世界的なギタリストの演奏会や、様々なコンサートなどが開かれており、遠方からのお客様でにぎわっており、杉山様の、熱い熱い願いが開花しています。

スペインの世界的ギタリスト、故マヌエル・カーノ氏のコレクションを主体に、古今のギターの名器が展示されており、ギターを弾かない人も必見の場所です。特に日本の伝統工芸である春慶塗のギターはここでしか見ることができません。昨年には、このギターでの演奏会も開かれました。入場料三百円（コーヒー付）。月曜が休刊日です。

何事にも行政に頼りつばなしの中「自分達で」という熱意と行動がまぶしいほどに輝いて見えました。

当駅は

ただ待つてても

幸せ号は到着しません

(ちえこ)

頑張ろう古里

小林幸枝

二月十七日、快晴に迎えられて、今年最初のことば座公演を行いました。二月十三日の新聞に紹介されたこともあって、大勢の方に観て頂きました。

新聞に紹介された日、中学の英語教師から突然に連絡が来て、「やっぱりあなたなのね」と大層驚かれました。そして、当日二十五年ぶりに再会し、とても嬉しい今年の始まりとなりました。

手話が舞いになるなんて凄いい、これからは多くの人達に知ってもらえるよう応援しますと云って頂き、心強い応援者がまた一人でき、益々頑張つて磨きをかけなければと心新たに今年の出発となりました。

試合を控え、練習で来れなかったデフバレーの仲間達からも沢山の応援の連絡をもらい、改めてメディアの力に驚かされました。さらに、買い物に行つて、お店の人にまで声をかけられたのは、本当にビックリです。

そして、こんなちっぽけでささやかな古里表現紙でも、きつと真面目に読んでいただき、影ながら応援してくれる人達がいるに違いないと思うと、ちゃんと書かなければと身が引き締まる思いになりました。

ギター文化館での「常世の国の恋物語百」は、恋歌の舞いを褒められたこともあって、脚本の白井さん（ふるさと筆名近藤さん）に、恋物語が良いな、ということが決まったのですが、ふ

るさとの風景などをモチーフに恋物語の中にふるさとへの思いを書き込んでいただいています。四月二十日の第七回公演は、園部川の源流にある馬滝をモチーフに、のっぺらぼうをテーマに恋物語の舞いを書いていただいています。何故、のっぺらぼうなのかは、まだ脚本が上がってこないで判りませんが、何だか面白そうです。

公演後にも、別の新聞に朗読舞が紹介され、友人や母の知人の人たちが応援してよ、と連絡をもらいました。

公演後、大変嬉しかったのは、ことば座の舞台背景の絵を担当してくださっている兼平さんが、ふるさとことば絵作家として新聞に取り上げて頂けた事でした。

「朗読舞」も「ふるさとことば絵」もこのふるさとに生まれた新しい表現です。この二つの表現をふるさとの新しい文化として育てていかなければと思っています。

今、まだ四月公演の脚本が渡されていませんが、兼平さんの「常世の国の五百相」と「ふるさとことば絵」の中で、どんな舞いを作ろうかと、イメージを膨らませています。

それにしても馬滝を見て「のっぺらぼう」という発想を持つ脚本家の感覚というのは不思議です。一度、頭を割って脳の中を覗いてみたいぐらいです。

私も体を絞って素敵なふるさと舞い美人になるように頑張るぞ！

梅の蕾も大きくなつたが、まだ寒い日の続くある日、同級生から誘いの電話が来た。三日後のことだけど一緒に出かけませんか、と。

急な話である。娘と孫が帰った後の片付けもまだやってないし、それに資金の問題もある。色々と思案の末、自分のことは何時でもやれる。昔の友と一緒に出かけるチャンスなんてそんなにとたくさんあるわけでもない。今を大切にしよう、と、ようやく決心をし、返事をした。

その日は興奮のせいか早くに目が覚めた。もう一眠りと思うが寝過ぎたのはいけないという気持ちが強くなり、しかし、このまま起きてしまうのも勿体ない気がして、温まった布団に包まれてグズグズと時間を待った。

外は寒いだろうと覚悟して家を出たのであったが、意外に寒さは感じなかった。心がウキウキしている所為なのかも知れなかった。

軽やかに足を運んでいるつもりであったが、普段よりは踏みしめる靴音が大きいのだろうか突然私に迫ってくる感覚にとらわれた。そして靴音は、「おい！ 何処へ行くんだい。金もないのに良い身分だね」とでも言っているかのよう

に聞こえてきた。
「今日の掛かりは五千元。ギリギリ間に合います」

「ほほう。それにしても今のあなたにや貴重な金だ。使ってしまった方がいいのかい」

チョット気持ちに引つかかっていたことが、

ギター文化館

2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

3月9日 角圭司 (ゲスト尾尻雅弘)

ギターリサイタル

3月23日 クエンカ兄弟

ギター&ピアノ・デュオ・コンサート

4月13日 荘村清志

ギターリサイタル

4月27日 烏力亜娜 古箏の調べ

ギター文化館も開設して今年で15年になります。魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ちいたしております。

0299 - 46 - 2457 FAX0299 - 46 - 2628

はしやぎすぎている自分を諫めるような感じに会話となつて聞こえてきた。もう出発したのだからそんなこと思わない、と改めて自分に聞かせ、まだ明ぬ空を見上げた。星がはつきりと瞬いて見えた。

気持ちが引つかかりを捨てると今度は自然に口ずさんでいる自分が現れた。二週間前まで孫達に唱つてやっていた子守唄だった。

ねんねんころりよ おころりよ

この子のかわいさ 限りなさ

天に昇れば 星の数：

そうだった。あの子たちの忘れ物を早く送ってやらなければいけなかった。今日の出かけが終わったら直ぐに送ってやらなければ。早足にあわせるかのように実に脈絡なく色々な思いが巡るものだと感心というか、驚いてしまう。

周囲は谷津田と里山である。この中にもたくさん生き物が眠っているのだろうと思いがら歩いていると、両側に柿や栗の木の枝が並んでいるのが目に入ってきた。

「私たちがやがて活動し始まるんですよ。その日のために今力を貯えているんです。行っくらつしやい。次に来る老いのために心と体の洗濯をしてらつしやい」

自分に都合よく、快い言葉をかけられているような気になった。今回は、七十歳近くになった同級生同士で、風呂に入ってゆつくりお喋りしようという事で決まった話だった。

坂を登りきって少し行くと四つ角がある。向かい側に大きな影と小さな影が並んで浮かび上がった。この二つの影は、私が親分子分と呼んでいる二人の看板である。個人的には関心のある人たちではないが、公人という立場になったのだから、もつと確り志を持って働いてもらいたいと常に思っている。大きな影は、肩書きをちらつかせるのが好きで、小さな影は大きな影にへつらつくついている。大きな影も小さな影もつまらぬことで自分を誇示したがつている。

こんなことを思っ歩いてっていると、苛立ちのせいか、足音も刺々しく聞こえてくる。待ち合わせの家に近づいてきたが、人の気配が全く伝わってこない。

「あれ？ 今日だったよね。時間、間違えないよね。皆行ってしまったのかしら」
急に不安が膨らんでくる。駆けるようにして友の家に急いだ。

友の家につくと、友が家から出てきて笑顔で迎えてくれた。ホッと安堵すると、わずか三分の歩きの何と長く感じられたことかと思われ

た。でも、これも良い体験。私も到着すると、次々に全員が到着。早速出発となった。

車の中は笑いが絶えなかった。同級生ならではの話。葉のこと、病気のこと、老いのこと。勿論、色気の話も。

「俺たち二人は今日はモテモテだ」とはしやぐ秀さん。爺さん婆さんになった男二人女四人の大笑いの愉快な一日になった。ちよつと強行かと思われたバス旅行だったが、湯

に入って体を癒し、皺を伸ばし、雪の残るお不動の参道に心を清められた。
「私、少し皺が伸びてきれいになったと思わない」

我家に戻り、玄関の戸にそんな声をかける気持ちで手をかける楽しい自分があった。

ギター文化館発：ことば座第七回定期公演

「常世の国の恋物語百」

4月20日(日曜日) 13:30会場 14:00開演
(第7回公演では、園部川をモチーフとした物語2話を予定)

第13話「潮の道余話」

大洋村の汲上浜から府中まで塩を運んだ道を潮の道と呼ばれていた。中間地点の倉数には塩蔵があり、近くには潮宮神社が祀られている。その御神木が語り聞かせてくれた園部川に命を落とした悲しい恋物語。

第14話「馬滝(のっぺらぼうの涙)」

園部川の源流の一つに馬滝(幻滝とも呼ばれている)がある。短い落差の滝が山頂へ延々と連なっている変化に富んだ幽玄な滝である。しかし、この馬滝をハンティングに出かけた脚本家は、何故か「のっぺらぼう」と心象した。のっぺらぼうに小林幸枝の舞をイメージして書下ろした、緑の涙の恋物語。

前売チケットのご予約は、ギター文化館(TEL0299-46-2457)へ。

ことば座事務局 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35
TEL0299-24-2063 Fax 0299-23-0150

承平・天慶（じょうへい・てんぎょう）の乱、いわゆる平将門や藤原純友が中央政府に反抗する事件や天変地異などで世の中が騒然としていた時代に僅か八歳で即位したのは第六十一代の朱雀（すざく）天皇である。当時は、三十年ほど前に「内覧（ないらん）」という天皇の最高顧問の地位に居た菅原道真が、藤原時平らの陰謀・讒言によつて九州へ左遷され、失意のうちに世を去つてからというもの、都では竜巻、落雷、大火事などの異変があり、地方に至つては旱魃（かんばつ）による不作、インフルエンザ、赤痢、疱瘡など悪疫の流行で人々が苦しみ、それに対する世直しの意味もあつて地方豪族が蜂起した。

異常な世の中に、「これは菅原道真公の祟りだ！」と誰もが思い込んで天神様に祀り高い位を贈つて鎮魂の行事などを盛んに行った。人間は生きていくから値打ちがあるので、死んでから煽り上げられても簡単に成仏出来るものでもなく天変地異は続いた。温室育ちの朱雀天皇は崇りを怖れて幼少時代に外出も出来ず母后に抱かれて育つたと言われる。それでも十六年ほど在位して、弟の村上天皇が二十歳の成人式を終えて天慶9年に第六十二代天皇となった。

この天皇は利口者で具体的現実的な鎮魂策として菅原道真の孫を顧問に登用し自ら政府を主導して政治の建て直しを図つた。当時最大の課題は地方の荒廃による国家財政の危機であり

「財政再建」が急務だった。第二次世界大戦当時には嫌と言うほど国民に聞かされた「贅沢は敵だ！」の標語が先取りに使われ、現代に流行中の「綱紀の粛正」が叫ばれたりしたが、贅沢や綱紀の乱れが該当するのは上流階層や役人が主であるから、どれほどの効果があつたのかは不明だが、犯罪や違法行為を取り締まる役人として泣く子も黙る「検非違使（けびいし）」の権限が強化されたのはこの時代である。

学問の神様・天満宮として尊敬される菅原道真公が個人的な恨みで人々に崇りを為すというのも矛盾した話であるが、この時代は自然の脅威に加えて貧困から徒党を組んで盗賊になる者も多く、不可解な出来事もあつたようで、都の繁華街に狼が出没して女性を噛み殺した事件などが記録されている。漠然とした世間の不安を何とかしようと、村上天皇は治世十二年目に年号を「天徳」と変えてみた。しかし、宝くじの当選なら良かったかも知れないが世情平穩化の効果は薄く、天徳4年（九六〇）の春に日本最古の官立寺院「天王寺（四天王寺）」が焼失してしまつた。推古天皇元年（五九三）に聖徳太子が建立したと伝えられる古寺である。やはり官立寺院の常陸国分寺が置かれたのは西暦740年代だから天王寺の古さが分かる。天王寺の本尊は如意輪観世音菩薩（にょいりんかんぜおんぼさつ）である。助けを求める声に応じて人間も動物も救済してくれる仏である。その趣旨で寺内には施薬院、療病院などが置かれていた。天王寺の火災は三月一七日の事だが、それか

ら二週間後に宮中では女房どもが主催する華やかな「天徳歌合（てんとくうたあわせ）」が行われ、天皇以下当代の歌人やら公卿なども派手な衣裳で参加した。「霞・鶯・柳・櫻・山吹・恋」などの題で和歌を詠み優劣を競つた。この行事は史上に残る文化的事業だったが一般庶民には無縁のものである。火災で救済福祉施設を失つた貧民たちは歌どころか溜息も出ない。天王寺は平安京を開いた桓武天皇も行幸されたことのある格式の高い寺で、御本尊は、持国（じこく）、増長（ぞうじょう）、広目（こうもく）、多門（たもん）の四天王を従えている。このうち多聞天は別名を毘沙門（びしゃもん）と言い、武器を持つているから気も荒い。焼け出されて居場所が無くなりムシヤクムシヤしているところに暢気な宮中歌合せの話聞いた。

「そんな暇があつたら貧民の救済を先にする！」と腹を立てたのだが、主の如意輪観世音が穏やかな仏だから「まあ、そう怒るな…」と宥められ毘沙門天も我慢をしていたのである。ところが、神仏の裁きは人知の及ばざるところで、半年後の天徳四年九月二十三日には皇居東外の左衛門府から火が出て、折からの風に忽ち御所中が煙に包まれてしまつた。真夜中のことだから誰も彼も慌てふためくだけで火の回りは早い。大阪・四天王寺の仮小屋で寝ていた如意輪観音は「京の都で御所が火事」と聞き「もしや？まさか？」と毘沙門天を疑つてみたのだが、大イビキで寝込んでいたようなので一先ず安心をした。

それよりも「鳴くよ鶯平安京」桓武天皇が都と定めてから168年、在位した天皇が十三代にして「内裏炎上」という大失態が生じたのである。「俺が崇拜した四天王寺が焼けたのに、宮中の女房どもが暢気に歌会などを開いたから内裏も焼けたのだ！」火勢が鎮まった闇の中から桓武天皇の厳しい声が聞こえたかどうか：ともかく村上天皇は警備の武士たちが担いだ駕籠に乗って、天皇の証拠となる「三種の神器」を抱えて避難したのだが、駕輿丁（かよちよう）と呼ばれた専門の駕籠役ではないから右に左に激しく揺れる。皇太后、皇后、后妃（皇后以外の夫人たち、一般には側室、村上天皇には多くの側室が居た）女官などは裸足で天皇の駕籠の後を追いついて、幼い皇子、皇女は女官が抱いて必死に内裏から離れた。取り敢えず南へ逃げて太政官の辺りで公卿たちが集まるのを待った。最初に到着したのは左大臣の藤原実頼である。

藤原氏は「我が世の春」を謳歌した道長の専横が知られている。実頼は道長と同系統ながら「小野宮流」として独自の存在感を保ち関白太政大臣になった。余談だが常陸国の豪族・大掾（だいじょう）氏は、多くの地方豪族が道長流に追従する中で小野宮流を主君筋に選んでいる。駆けつけた実頼は、煤けてはいるが天皇の肉体的な無事が確認できてから「三種の神器」のことを聞いた。

「大丈夫、朕が確りとお守りを致しておるぞ」村上天皇は、そう言いながら駕籠の中から先ず「草薙の剣」を出し、懐から木箱に入った「神

璽（しんじ）」をモソモソと取り出して実頼に見せた。神璽とは「八尺瓊勾玉（やさかにのまがたま）」のことである。古墳から出土する古代のアクセサリーで珍しいものではないが、多分、箱の中に鑑定書か注意書でも入っていたのであろう。

「お上、神鏡は如何なされましたか？」実頼に言われて、村上天皇も「八咫の鏡（やたのかみ）」が無いことに気づいた。「三品は朕が身に添えて駕籠に乗った筈なのだが：」そなた達は気が付かなかったか？」実頼が駕籠を担いできた武士に問い質した。武士と言っても普段は御所に上がることさえ許されない警備の者が緊急時で天皇の駕籠を担がされたのだから恐縮して蛙のように這い蹲っている。途中のことなど冷静に覚えてなど居ない。クダラナイ格式や權威にしがみ付いて成り立つ世界だから、下手をすれば緊急時とはいえ許可なく内裏に踏み込んだ罪で処罰されかねない。返事も出来ずにいた。民主主義とされている現代でも宮内庁辺りの役人の感覚は千年前と同じなようで、昭和中期だったと思うが、私の上司が霞ヶ浦で行われた国体の支援隊長を命じられて会場に居た。ポト競技か何かが始まるので皇太子（今の天皇）の一行が湖畔の観覧席に來た。どういふ手違いか、お供が遅れて皇太子一人が湖畔にポツンと立っていた。支援隊長は気さくな人物だったから皇太子を席まで案内して喜ばれたのだが、遅れて來た宮内庁の愚図官僚から「勝手に誘導した」と厳しい苦情を言われたと憤慨していた。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。

入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

仕事の本質よりエリート意識を優先させる思い上がりの連中は何時の時代にも何処にでもいる。

さて村上天皇が一旦は駕籠の中に入れた八咫の鏡は、激しい揺れで途中に落としてしまったらしい。藤原実頼は武士たちを半数に分けて、一組には天皇・皇族を護らせ、自ら一組を率いて火災現場に引き返した。神鏡が普段、安置されている温明殿（うんめいでん）は火元に近かったから完全に焼け落ちていた。実頼は武士たちに適当な棒を持たせて焼け跡を掻き回させた。火は残っているから熱いが火傷をしても探さなくてはならない。暫くは焼き芋屋のアルバイトのように灰だらけになって必死に探した。努力の甲斐あって出口付近で焼けて変形した鏡が見つかった。形はどうでも現品さえあればどうにかなる。

焼けた鏡を見せられた村上天皇は、自分が落とした責任を感じて少し沈んだ顔をしていたが、実頼に励まされて一応は「三種の神器」が無事だったことに気を良くした。火事騒ぎが収まると早速、内裏の再建が命じられ、そのための費用として美濃、尾張、若狭三か国の収益が充てられることになった。国家財政困窮の折の重なる負担に国民は憤懣やるかたない。せめてもの憂さ晴らしに誰かが「平将門の遺児を擁する残党が都に潜伏して要所を襲撃する」というデマを流した。驚いた朝廷は檢非違使を総動員し、かつ源氏の頭領・多田満仲に協力させて捜索したが何も見つかる筈がない。関東で起きた平将門の事件が朝廷を始めとする都の人々に予想以

上の大きな恐怖を抱かせていたのである。

現在は条文が削除されていると思うが、旧皇室典範には皇位継承の証しとして「三種の神器」の承継が規定されていたという。つまり皇室の家宝のような三品を持つていないと、幾ら血筋が良くても天皇とは認めて貰えなかった？…三種の神器の起源は「古事記」の伝える神話によれば、天照大神が、孫の邇邇藝命（ににぎのみこと）の天下りに際して、「天下り」は評判が悪いので言い方を変えれば、普通のサラリーマンだった孫が、急に王様にさせられて赴任して来るときに「王の証拠」として持たせたものである。さらに遡れば天照大神が、弟の速須佐男命（はやすさのおのみこと）と相続問題で対立して不利になったので天の岩戸に隠れてしまった。その時に取り巻きの連中が「出てきてちょうだい！」と、榊の木にぶら下げたのが鏡と剣と勾玉の三品である。これらの品物はいずれも古墳の出土品であるから、考え方をさらに飛躍させれば、先々代の女王だったバアチャンが死んで、その形見の品だったのであろうか。

不思議なことに「三種の神器」が登場するのは、それ程古くない時代からだという。そして「三種の神器」が重視されたのは源平合戦や南北朝時代、つまり皇族の血統を引く者ならば、誰が天皇になっても良い時代に権威の裏付けとして「形の有るもの」が必要になったからだと考えられる。明治維新を迎えた日本は「万世一系の天皇」を強調するために皇室典範に神器の規定をした。

村上天皇の時代に皇居の火事で八咫鏡を焼いたのは事実のようだから（責める訳ではないが）その時代には既に内裏に神器が安置されていたのであろう。一つの推測として、個々の神社に神として祀られていた神器を天皇の傍に置くようになったキツカケは石岡地方を巻き込んだ平将門事件だったと考える。

平将門は常陸国府（石岡）を攻撃して町を焼いた後、下野（栃木）、上野（群馬）の国府へも押しかけた。両国府の役人は諦めがよく、「これは敵わない」と判断して城門に白旗を掲げたので町は荒らされずに済んだ。将門は国府の公印を押収した。地方諸国にとって公印は三種の神器に等しいものである。万歳を三唱した時に何処の神社からか一人の巫女さんが出てきて「私は八幡大菩薩の使いの者だ」と口走り将門に「朕（天皇）の位を授ける。その役は左大臣で正二位だった菅原朝臣（道真公）の霊魂が捧げ行くところである。八幡大菩薩は八万の軍勢を催し朕が位を授けるであろう…」と天皇になることを示唆した。八幡大菩薩だから八万の軍勢などは洒落がキツくて振り込め詐欺に似ているから、心ある者は「怪しい！」と思って止めたのだが、将門は勝利に酔っているからその気になって、自らを「新皇」と称して仲間を豪族たちを適当な官職に任命したとされている。将門の心境は、将門記にあるように「伏して昭穆（しようぼく―家系）を案ずるに、将門已に柏原帝王五代の孫なり・云々」と自分にも天皇になる資格のあることを仄めかしている。

学識の誉が高かった菅原道真が出世コースに登用されたのは四十七歳の時である。後に道真を陥れる藤原時平は当時二十代で高官に任命されている。皇族出身の政治家が居るにしても当時は既に藤原一族が天皇の周囲を固めて政治の実権を握り始めた時代である。都暮らして政界の内幕を知る将門が藤原一族恐れるに足らずと知り自分も天皇になれる可能性を知ったとき大規模な反乱事件が起こった。その様な事例を絶つためには天皇の権威を物理的に強化しなければならず「三種の神器絶対視説」はそこから浮上したのだと思う。したがって「三種の神器」にまつわる話は単純な疑問が多い。

神武天皇はともかく、今のところは第十代の崇神天皇が“本当に居た(怪獣のような言い方で申し訳ない)”大和朝廷の初代大王らしい。その長男の豊城入彦命は弟との相統競争に負けて東国平定に遙々と遠征してきて旧・八郷町一帯にも足跡を残している。そして実の妹の豊鋤入姫命は八咫鏡を護る巫女として青春時代を犠牲にした。第十一代の垂仁天皇の時に豊鋤入姫命は高齢を理由に巫女の職を解かれ、八咫鏡は伊勢神宮のご神体として祀られたと伝えられている。一旦は伊勢神宮に置かれた八咫鏡は、先に述べた天皇の権威強化の目的から、また昔のように内裏の中に飾られるようになった。現在のように伊勢神宮に戻されたのは天皇制が確立された極々近年のことなのか、或いはどちらかが複製品なのかは知りようがない。

宝剣の「草薙剣(くさなぎのつるぎ)」にして

も、出雲神話の八岐大蛇から始まって、須佐之男命が天照大神に献上し、それが伊勢神宮に奉納されて豊鋤入姫命と交代した倭姫命(やまといめのみこと)が独断で借用書も無しに日本武尊に貸した。日本武尊は恋人の尾張の宮寶姫(みやかずひめ)の家に宝剣を置いたまま息吹山に棲む妖しい猪退治に出かけて毒気にあてられ病死してしまふ。それで神劍は熱田神宮に祀られているというが実に無責任なもので、日本武尊は景行天皇の皇子ではあるが天皇ではない。また須佐之男命は大和朝廷に国譲りをした出雲系の神様だから草薙剣が三種の神器になること自体がおかしい。

残る「八咫瓊勾玉」は神代から現代まで天皇の居場所に置かれていたようであるが、実はこれも平家滅亡の時(安徳天皇が、平清盛夫人に抱かれて壇ノ浦に入水したとき)海に沈みかけて源氏の武士が拾い揚げたことになっている。鏡も剣も海中に投げられ探した結果、剣だけが見つからず、責任者の源義経は頼朝に怒られた。しかし「三品目とも見つからず造り替えた」説が強い。平家の祖先は石岡に眠る平国香だから将門のこともあって「三種の神器」と石岡は微妙な関係になる。何しろ「神器」だから、その崇りで石岡市の発展が遅れているのかも知れないが形ある物が焼けたり壊れたり失ったりするのは仕方ないこと、此処は観念して、せめて郷土の歴史を率直に伝える心構えが大切。

石岡は「歴史の里」と言われるが、冷静に考えれば日本六十余州、どこにでも似たような歴

打田昇三歴史エッセイ

ふるさと「風にたずねて」()

小紙に毎月連載されている打田昇三氏の「ふるさと歴史探訪」が二冊の小冊子にまとめられて、ふるさと風の文庫として発売することになりました。(二冊組：1000円)

小さな手作りの文庫本ですが、風の会のふるさとを思う心が一杯の本です。

冊子は、ギター文化館、中町商店街カフェ・キーボーにて販売しています。

史が存在する訳だから「こういう立派なものがあった」と自慢してみても普通のものでは満足して貰えない。例えば「国分寺に建てられていた七重の塔」にしても、石岡の人は誇らしげに言うかも知れないが、国分寺設置の詔が出る前年の天平十二年六月には「国ごとに法華經十部を書写し、七重の塔を建てよ」という命令が既に出されていた。つまり諸国に七重の塔を建てるのが最初の目的だった。しかし地方自治体に余分な金がある訳ではなく、七重の塔は技術

的にも難しいから容易には出来ない。中央政府は、現代と同じで下々の事情など眼中に無いかから「塔を造るなら序でに国家安泰の祈願所も建ててしまえ」と翌年の三月二十四日に国分寺建設が命じられた。国分寺の「分」は仏教用語で「何々の為の」という意味があるそうで、文字通り危機に瀕している国家の安全、つまりは皇室の安泰を祈願する為の寺であった。ダブルパンチで困った諸国では国分寺建立を優先させて、飾りの塔は五重か三重で勘弁して貰うしかなかった。幸か不幸か常陸国は大国だから誤魔化すことが出来ずにまた金持ちも居て塔が七重になっただけのことであり自慢にはならない。

なぜ、朝廷はそこまでして国分寺など建てたのであろうか？…話は約二十年ほど遡り、養老三年（七一九）には常陸風土記に関わる藤原宇合（ふじわらうまかい）が常陸国の長官として石岡に赴任してきた。しかし翌年の夏には宇合の父親で右大臣だった藤原不比等（ふじわらふひと）が病死する。不比等は大化の改新の立役者・藤原鎌足の嫡男ではあるが、実は天智天皇の子であるという説が強い。長女の宮子は第四十二代・文武（もんむ）天皇の夫人（ぶにん―皇后に準ずる后妃）となつて聖武天皇を生む。石岡に居た宇合は葬儀の為に帰京しなければならぬのだが、常陸国は当時、反乱の続く蝦夷防御の拠点であり、また宇合は按察使（あぜちし）という地方諸国行政監察官も兼ねていたので関東を動けない。長兄の武智麻呂（むちまろ）が葬儀を執行した。

当時の天皇は、聖武天皇の伯母の元正女帝で、行政面で不比等に頼るところが大きかったためショックで政務を執ることが出来なくなった。元正女帝にも文武天皇にも母親である元明女帝（先帝）が確りしていて何とか政務をこなしたが、不比等の死は政界に大きな影響を与えたのである。朝廷は不比等の労に對して「封戸（ふこ）七千」を与えた。それは庶民七千戸分の諸税と、耕作地などの収入半分が全て与えられるもので莫大な収入である。

藤原不比等には四人の男子と二人の女子が居た。他に梓外生産の児女が居たかも知れないが省略する。葬式で喪主を務めた武智麻呂は後に右大臣になったが気弱で健康ではなかったらしい。次男の房前（ふさぎき）は参議から元明女帝時代に内大臣を命じられた。葬式にも出られなかった三男の宇合は自分では一番、苦勞したと思つていたらしいが遣唐使（副）で海外留学したり、石岡にも居たり、持節大將軍（じせつだいししょうぐん）として蝦夷征伐をしたり各地を巡つて退屈しない人生を送った。持節大將軍というのは天皇から剣を貰い天皇の名代として行動が出来る凄い権限と名譽を与えられる職務である。四男の麻呂（まろ）は藤原氏の権力増大のため三人の兄に協力して参議になったが、あまり政治は好きではなかったらしく酒が好きだった。四人兄弟の家系が「南・北・式・京」の四派に分かれて藤原一族を形成してゆく訳だが、一番地味で目立たなかった次男・房前の北家が後に他派を圧して主流となる。

一方、女子は不比等が地域有力豪族の娘と結婚して生まれた「宮子」が文武天皇の夫人となり首（おびと）皇子こと聖武天皇を生んだ。そして第四十一代の持統天皇（天智天皇の皇女で文武天皇皇后）に側近として仕え、幼い頃の文武天皇の乳母でもあった県大養橋三千代（あがたいぬかいのたちばなみちよ）との間に生まれたのが安宿媛（あすかべひめ）である。安宿媛は幼少の頃から聡明だったと伝えられるが、むしろ当時の女性の感覚で言えば否定される積極的で行動力のある女性だったらしい。しかし、母親の三千代が深く仏教に帰依していたので、その影響は受けていた。当然ながら両親ともに安宿媛の配偶者は天皇に標準を定めていた。偶々、同じ年に文武天皇と藤原宮子との間に首皇子が生まれたので、安宿媛は、姉の子ではあるが聖武天皇に娶わせられる運命が定まつており十六歳で宮中に入り光明子と名を変えた。

こうした不比等の行動を批判的に見ていた人物がいる。文武天皇の第一皇子である高市（たけち）皇子の子・長屋王（ながやのおおきみ）である。母親は元明天皇と姉妹だったとされる。本来なら高市皇子が皇位を継ぐのであるが、母親の関係で弟（天皇と皇后の子）草壁皇子に皇統が移り、草壁皇子の早死にで元明天皇（草壁妃）―元正天皇（草壁皇女）―文武天皇（元正帝の弟）という皇位の流れが出来てしまったのである。一方、娘を皇室に入れて朝廷内に権力を維持しようとしている藤原不比等の本来の狙いは別にあつた。それは天武系に渡つた皇統

を早く消滅させ天智系の天皇に戻すことである。天智天皇と藤原鎌足が蘇我王朝をクーデターで倒し大陸系の要素を除いた王朝を創つたのに天智天皇の死で皇位を継いだ大友皇子(弘文天皇)は、叔父の大海人皇子(天武天皇)との争い(壬申の乱)に敗れて天皇の名簿から削除された上に首まで斬られてしまった。藤原一族も消され不比等は未成年で助かっていた。いわば天武天皇に皇位を奪われた。それを回復したい。

ところが、不比等の娘が文武天皇の夫人となつて聖武天皇を生み、聖武天皇には安宿媛こと光明子が配される道筋が出来てくると、天武系でも藤原寄りの天皇が実現するから不比等には悪い話ではない。問題は聖武天皇と光明子との間に世継ぎが生まれることである。不比等が死ぬ二年前に孫は生まれたが皇女だった。後に孝謙天皇・称徳天皇として重祚(ちようそ)する高野媛命である。将来を考慮した不比等は天皇に嫁した自分の娘たちを皇后にすることを画策するのだが、長屋王は「朝廷の原理原則」を主張してこれを阻止した。

養老七年(七三二)、藤原宇合が石岡から都へ戻ってきた。藤原四兄弟は不比等の遺志を継いで、妹である光明子を護り、対抗するように長屋王は大臣の地位に上ってきた。神龜四年(七二七)、九月に光明子は待望の基皇子(もといおうじ)を生んだ。この皇子は異例の速さで皇太子に立てられたが、病弱で翌年の誕生月に死んでしまった。石岡から柿岡に至る街道の、かつて常陸国府の敷地内と思われる場所に神龜五年

九月創建の「若宮八幡宮」がある。聖武天皇が諸国に対して皇太子の無事を祈らせたようだから、若宮八幡宮はそのために建てられた神社であろうと私は思っている。都では金光明経六百四十巻を作つて諸国に十巻ずつ配給された。これが国分寺建立の前触れである。

天平元年(七二九)二月、突如として長屋王が「天皇を呪つた」という根拠のない罪で逮捕された。指揮を執つたのは天皇を代理する將軍の肩書を持つ藤原宇合である。呆れた長屋王は何も言わず家族を道連れに自殺した。これで障害は除かれ藤原光明子は初めて皇族以外から皇后となった。しかし皇子は生まれることがなく、天平十年(七三八)には二十歳になった高野媛命が、女性初の皇太子に立てられた。聖武天皇を始め光明皇后、そして皇太后の立場にある聖武天皇生母・宮子夫人が皇太子の後見をする。

ところが本来は朝廷の要職にあるべき藤原四兄弟は当時流行の疱瘡に罹り前年に相次いで病死していた。政権の座に就いていたのは唐の国の留学から帰国した僧・玄昉(げんぼう)と吉備真備(きびまび)の二人で、彼らは仏教の本場・中国から学んできた新しい仏教の理論を展開して皇室から尊敬されていたのである。

この状態を憤つたのが、亡き藤原宇合の嫡男で九州に行かされていた藤原広嗣(ふじわらひろつぐ)である。個人的な不平も有つたとは思ふが、平将門と同じように地方人民の苦しい生活を知り、都で小難しい仏教の理論ばかり並べても何の役にも立たないと、再三に亘つて天皇

に意見を具申したが、聞いては貰えず遂に玄昉と吉備真備の追放を叫んで反乱を起こした。九州は蝦夷と同じで国防の最前線だから多くの軍勢が居る。それなのに広嗣が簡単に討伐されてしまったのは不自然であるが、当時、宇合ら藤原四兄弟の死を機に勢力拡大を企んで玄昉らと組んだ橘諸兄(たちばなのもろえ)の陰謀挑発説もある。

事情はともかく、天皇に刃向かつたのが自分の甥であるから、光明皇后の心中は穏やかではない。父・不比等の死から二十年足らずの間に皇子の夭折、母(橘三千代)の死、政界に重きをなしていた四人の兄の同時の急死、甥の反乱、女性皇太子とした高野媛命(阿倍内親王)の将来にたいする不安、特に温室育ちで気が弱い聖武天皇が甥の反乱で受けた精神的ダメージの大きさが皇后の悩みの種だった。動揺した天皇はノイローゼ状態となつて都を離れ気分転換の意味で地方を転々と回つた。もともと移り気の癖があり、各地を回るのが好きな天皇ではあったのだが：当然、政務は橘諸兄、玄昉、吉備真備らの独占するところとなる。諸兄らは琵琶湖に近い甲賀地方に都を遷すことを狙っていた。

光明皇后は信心深い聖武天皇を御仏の力で立ち直らせようとする。その頃、地方回りをしていた聖武天皇が河内国の大泉(おおあがた)郡にあった知識寺(ちしきじ)という寺で地元民が建立した毘盧舎那仏(びるしゃなぶつ)大仏、光明遍照、華嚴経主、大日如来)を拝んだ。現在には廃寺となっているようだが、大阪府柏原市、

飛鳥地方に隣接する地域であり大陸系の帰化人が多く仏教の盛んな土地柄であった。知識寺の大仏に魅せられた天皇は自分も大仏を建立したいという想いに取り付かれた。仏法を大切にすゝる気持ちは皇后のほうが強い。そうは言っても、大仏の建立となると長い準備、莫大な予算、緻密な技術、多数の労力を要し、目的の正当化、場所の選定も難しい。しかし天皇の悲願とあつては放つても置けず、光明皇后は積極的に解決策を考えたようである。

藤原四兄弟が倒れた天平九年には、打ち続く凶作と疫病を防ぐという目的で諸国に「大きな釈迦像と脇侍の像二体を造り大般若経1部を書写せよ」という命令が課せられ、次に来た難題が既に述べた常陸国分寺七重の塔のことである。そして遂に天平十三年（七四一）諸国国分寺建立の命令が発せられた。大仏建立の困難さを考慮して、光明皇后は諸国に国家安泰を祈る寺を建てさせることにより天皇が望む大仏を諦めさせようとしたのではなからうか。天皇は奈良（平城京）から京都府加茂へ滋賀県甲賀へ大阪城近辺と次々に移動し政府が混乱状態に陥っていた。大仏建立を諦め切れない聖武天皇の示威運動だった。天皇の執念に皇后も折れた。一族や聖武天皇の生母（宮子夫人）と相談して、藤原不比等々に朝廷から下賜された封戸七千のうち、広嗣の乱のお詫びとして、封戸五千の返上を決めた。朝廷は五千のうち三千を受け取り二千を藤原氏に戻させ三千の封戸を諸国六十余の国分寺建立費用として配分した。勿論、是だけで国分寺が

建てられる訳がないが諸国には大仏建立の負担もさせなければならぬ。遂に天平15年、聖武天皇の念願が叶って大仏が建立されること決定した。場所は何ヶ所かが選ばれたが、最終的に大和国分寺（後の東大寺）を諸国の総国分寺とすることで名目も立ち「奈良の大仏」が誕生した。

「国分寺（尼寺）は聖武天皇の詔により造られたことになっているが実際に事業を進めさせたのは光明皇后である」という説は公然の秘密である。石岡の場合、本来の国分寺は創建から約80年後に焼けて廃墟と化した。他の諸国でも似たように荒廃が進み、現代では当時の遺構が辛うじて確認できるのは常陸国分寺ぐらいであるらしい。当時の人々が過酷な税や労役で築いた朝廷の夢は僅かな期間で跡形も無く消えたのである。念願の奈良の大仏を建立した聖武天皇も遂に精神の充足を得ることなく大仏の前で年号を改正しただけで苦悩のまま生涯を終えた。巨大な寺院も大仏も豪華な堂塔も多数の経文も自らを信じて正しく強く生きる真摯な努力には及ばないのである。神も仏も宝物に依拠することはない。焼けた神鏡ではないが物は物、人は人である。

朗読舞「馬滝」へのアプローチ 近藤 淳

ことば座の四月公演の題材を女優の小林幸枝さんの希望で、園部川の源流にある馬滝に求め、恋物語を書くこととなった。始めて馬滝を見たときに、のっぺらぼうな滝と感してしまったのであったが、これをどのような物語に組み合わせるか思索した結果、今回は、馬滝の心象を基に幾つかの恋詩を書き、それを小林さんを選択してもらい、その詩を基に構築してみようと考えた。全部の詩を紹介するわけにはいかないが、その幾つかを紹介してみたいと思う。詩にはあえて題名を立てず、番号だけにして小林さんを選択をゆだね、選択された詩をベースに物語を組み立ててみようという、新しい試みであった。

× × ×

(一) 言葉は腐肉になってしまった。

説明と言いつの道具になってしまった。

恋を表現することを知らないお前たち

桜の木下で

抱きあって説明をするな

抱きあって言い訳をするな

恋をして抱きあったら言葉を歌え

抱きあった

重なりあった

心臓の打ち鳴らす鼓動が

一つになればそれでいいのだ

(一)

私は沈黙の滝と名付けた。

君は今日も

沈黙の滝を登ろうという。

私は

ただ黙々と段差だけを連ねる

言葉のない

風のない沈黙の滝は

嫌いだ。

でもあなたは今日も

沈黙の滝に私を誘う。

はてしない段差は、ただの横たわる道

真つすぐ立てに伸びて横たわった澱んだ水の道

風もなく

言葉もない。

だが、

横たわっているこの段差の澱みの滝は

いつかは立ち上がり

言葉を囁き

風を詠うだろう。

でも

それは何時なのかは判らない。

でも

間違はなく

横たわった沈黙の段差は

起きあがり

立ちあがるのだ。

しかし、それが何時なのかは判らない。

発狂する私の心。

でも

あなたは

言葉は嫌いだという。

もう

言葉はいらないという。

(二)

君は 心が疲れて

心が沈殿してくると

底に推積して

悪臭の立つ汚泥を

私に きれいに掃除するよう命じると

私の前から

私が悪臭の汚泥を

すっかり きれいに 浄化が終わるまで

姿を消して

音信も絶って

何処かへ行ってしまう。

途方に暮れた私は

悶々としながら

一人 ブツブツと醜酔の音を立てて

悪臭の弾けて放つ汚泥を

小さな

あまりに小さな

ままごとの安っぽいプラスチックの

ピンクのシャベルとバケツを手

水底から静かに掬い上げる。

汚泥を舞い立たせないように。

私の心に汚泥が流れ込まないように

注意しながら。

底に沈殿した汚泥をすっかり浚い上げると

次に私は

澱んだ水を

コーヒーを淹れるように

小さなペーパーフィルターで漉して清んだ水

に作りかえる。

すでに気の遠くなる自分のための作業。

(四)

眠るのが恐ろしい。

太陽が照りつける昼間に

私は現実を認め

不幸を心に受け入れる。

陽が落ちて暗闇が訪れたとき

私は不幸を優しく抱いて

汗に湿つけて饑えた床に入る。

だけど、

深い眠りに落ちた時

夢の奴が何処からか現れてきて

ようやく認めて受け入れた

現実という不幸を壊し

希望の苗木を植えてしまう。

希望の苗木は夢の中で確りと芽を出し

朝にはもう葉を茂らせている。

そして希望は目覚めると苦悩を強制する。

私は眠るのが恐ろしい。

(五)

永遠とは移ろう時のこと。

この地球上には永遠は存在しない。
地球も永遠ではない。

宇宙の総ての物体に永遠は存在しない。
永遠を持つ唯一のものは移ろう時。

私はあなたに永遠の愛を誓い
精一杯に言葉を紡ぐ。

しかし、
永遠は存在しない。

私が死んでしまえば私の愛も肉体もそこで
終わる。

永遠は移ろう時。

人類が滅亡しようとして

地球という緑の星が消滅しようとして
移ろう時だけは

後退りすることも
過去を振りかえることも
また

未来を考えることもせず
ただひたすらに

脈々と

刻々と決まったテンポで
移ろっていく。

移ろうためだけに移ろっていく。

永遠に。

この太陽系の惑星が全て霧散し
宇宙の塵となって浮遊しようとも
時は何の感情も感動ももたず

ひたすらに
永遠に向って移ろいを刻み続ける。

終りの持つことを許されない時
移ろう時
それは余りにも残酷で完全なる絶望。

休むことも
止まることも許されず

律儀だけが課されて刻み続けなければなら
ない
完全無欠な残酷なる絶望。

私は永遠はいらない。

私はあなたに永遠の愛を誓い
精一杯に言葉を紡ぐ。

しかし、
私が死んでしまえば私の愛も肉体もそこで

終わる。
私は老いさらばえて

風の中に死暮れてしまうから
あなたを恋する私が

移ろう時の中で輝いていられるのだ。
だから！

花を咲かせた一本の桜の古木の下で
私たちは踊ろう。

そして古木に聞こう。
風の話しを…

昔は良かったという話を…

昔は静かだったという話しを…
昔は美しかったという話しを…
私たちは踊りながら昔を再現しよう。

昔、
古木がまだ若木だった頃

一組の男女がこの根本に横たわり
風に恋の夢を踊った。
美しく

鋭い喜びの声をあげて風に恋の夢を踊った。
だから

私たちも風に踊りながら
昔を再現しよう。

私は、永遠はいらない。

私が死暮れの時を迎えるまでの
わずかな時の移ろいの中で
あなたを愛することができればいい。

× × ×

実際には九編ほどの詩を渡したのであった。
私ののっぺらぼうと馬滝を心象し、それを基に
思いつくままに書いた詩を小林さんが選択して、
それから物語を組み上げるのであるが、こうし
た新しい試みができるのは楽しいことである。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

TEL 0299-24-2063

(白井啓治方)